

新刊案内

+Olivier Messiaen: Livre du Saint Sacrament(Leduc) ME1/M585/14

これはメシアン最後のオルガン作品として(1984年)20世紀のオルガン音楽史上、最も重要な作品とあってよいだろう。「聖体秘蹟の書」というタイトルからも察せられるように、典礼のためでもあり、カトリシズムの思想を音によってあらわした書 *Livre* でもある。18曲からなり、その1曲1曲に、具体的なタイトルと聖言葉が付されている。その言葉は福音書であったり、旧約聖書の預言書であったり、イミタチオ・クリスティ、またトマス・アクイナス、ボナヴェントゥラのような13世紀の神学者の著書からの引用だったり様々であるがそれらの言葉が音楽と密接に結びついていることは明らかで、言葉に対する深い理解と共にそれらを選んで構成したメシアンの思想を知ることなしに演奏はできないであろう。そしてキリストの受難～復活を通して聖体を黙想していることも忘れてはならない。

彼は晩年、唯一のオペラである「アッシジの聖フランシスコ」という大作を9年かけて作曲した。この *Livre du Saint Sacrament* はその直後に着手され、燃え尽きることなくオルガンへの強い愛を示した。これらは彼が実際に教会で行っていた即興演奏に基づいているとされている。

メシアンのオルガン楽譜はこれで14冊目の購入になりますが、資料室に置くのはコピーの台本とするためではないので、著作権の切れていない作曲家の作品(特にメシアンの場合薄いピースが多い)を安易にコピーすることは慎んでいただきたいと思います。一時的なとりあえずコピーはさしつかえありませんが、勉強するときは作曲家の創作への敬意を持って、楽譜は購入しましょう。

+那須輝彦：教会旋法再考～なぜ正格と変格にわけられるのか～

本科の音楽史の講師である那須先生が青山学院大学の比較芸術学会誌(パラゴネ 創刊号)に寄稿した紀要論文。閲覧なされたい方は杉本までお声かけください。